

---

# バカとFクラスと転校生 IF ~オレと瑞希と召喚獣~

黒炉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカとFクラスと転校生 IF ～オレと瑞希と召喚獣～

### 【Nコード】

N1515W

### 【作者名】

黒炉

### 【あらすじ】

この物語は『バカとテストと召喚獣 バカとFクラスと転校生』のIFストーリーです。

真琴は幼い頃に両親をなくし、向いに住んでいた瑞希の家で暮らしているという設定です。

瑞希以外には決して心を開かない真琴が、体調不良でFクラス入りしてしまった瑞希のためにAクラスに試験召喚戦争を仕掛けます！

『バカとテストと召喚獣 バカとFクラスと転校生』の真琴とはかなり違います。

また、明久と瑞希は両思いではないので注意。  
駄文ですが、お付き合いください。

## 第1問 振り分け試験の不幸な出来事

振り分け試験。それは科学とオカルトと偶然によって発見された「試験召喚システム」を取り入れた進学校、文月学園のクラス決め試験。

文月学園はAクラスからFクラスまで6つのクラスがあり、成績のいい者はよりいい設備、成績の悪いものはより悪い設備での勉学を強いられる。

1年間のクラスを決めるこの大事な試験で、二人に不幸が訪れた。

真琴SIDE

「では、始めてください」

監督の教師の合図で一斉にテストを開始する。

今のオレの頭なら学年主席は余裕だろうし、瑞希も学年次席まで行

くだろう。

来年もまた、同じクラスでいられるんだ。

そう思うと、よりペンが進む。

二人でAクラスにいける。

そう思っていた。

「はあ……はあ……」

なんとなく隣から聞こえてきたような弱弱しい声。

ふと隣を見ると、瑞希は赤い顔で、今にも倒れそうだった。

（大丈夫かな……？昨日も調子悪そうだったし…今朝は気分が良くなったって言ってたけど……）

気になって試験に集中できない。

オレの隣で試験を受けている姫路瑞希は、もともと体が強くない。

昨日も熱があったようだし、心配はしていたけど……

（一緒にAクラスに行こうって約束したんだ。瑞希ならきつと大丈夫……）

そう思っていた矢先にガタン！と音がした。

音がした先を見ると、瑞希が倒れかけていた。

「瑞希！」

考えるより先に体が動いた。

「おい、大丈夫か！？」

瑞希の額に手を当ててみる。  
かなり熱がある。やっぱり昨日の熱は下がってなかったんだ。

「峰嶋。席に戻りなさい。姫路、保健室に行くか？ただし、その場合は試験は無得点になるが」

「なつ……！？そんなのあんまりじゃないか！瑞希は体調が悪いだけなんだぞ！？」

「本番にむけた体調管理も試験のうちだ。お前も早く席にもどれ」  
「冗談じゃねえ！瑞希がこんな状態なのに、オレだけ試験受けてられるか！！」

「貴様……！教師に向かってその口の利き方はなんだ！！」

口の利き方なんかどうでもいい！

はやく瑞希を保健室に連れて行く。

その時のオレは、それ以外何も考えていなかった。

「お、おい！何をしている！」

「何って決まってるんだろ。瑞希を保健室に連れて行くんだ」

「早く席に戻りなさい！お前も無得点にするぞ！！」

「瑞希がないのに、Aクラスなんかに行ったってつまんねえ。」

そついい残して、オレは瑞希に肩を貸して振り分け試験の教室を出た。

『もういい！貴様の事は、学園長に報告する！！』

「病人がいるんだ！騒ぐな！」

二人で無得点になった以上はFクラス入り確定だろうな……

昨日オレがちゃんと診てやってれば……

その後悔しながら保健室に向かう。

「ま……こと……くん」

「おい、大丈夫か？無理して喋るな」

「私は良いですから……真琴君だけでも……試験を……」

「何言ってるんだ。瑞希がいないんなら、Aクラスに行くつもりはない。一緒にAクラスに行くって約束しただろ」

一緒にAクラスに行く。

それが昨日、瑞希と交わした約束。

それを破りたくはない。

たとえFクラスでも、瑞希がそこに行くならオレも行く。

瑞希が今からでも試験を受けて来いというのを断って保健室に着いた。

「すみません、1年の峰嶋です」

「あら、どうしました？今は振り分け試験の途中ですが？」

「姫路瑞希さんが体調を崩して高熱を出したので、つれてきました」

「あら、そうですね……私は今から出かけないといけないのですが

……」

保健室の先生は出かけるのか……

ある程度の処置なら自分でも出来るから大丈夫かな……

「分かりました。氷とビニール袋とタオルの場所を教えてください。オレが処置します」

「タオルと袋はそこですけど……大丈夫ですか？」

「大丈夫です」

オレが処置を出来る旨を伝えると、先生は行ってしまった。

保険の先生も忙しいんだな。

「真琴君……」

「待ってる。今氷を用意するから」

瑞希をベッドに寝かせてから、氷をビニール袋に詰めてタオルで巻いたものを二つ、氷枕を用意する。

氷枕は額に、氷をビニール袋に詰めてタオルで巻いたものは両方のわきの下に当てる。

「熱を下げたいときは頭よりもわきの下を冷やしたほうがいいんだ」

これでも熱の下げ方くらいは知ってるし、医学の専門書も少しは読んだ。

「本当なら汗もしっかり拭いたほうがいいんだけど……」

一般的に汗をかいて熱を下げるという方法があるが、あれは熱で体力が下がってるときに余計な体力を使わせることになるという間違った治療法だ。

汗は可能な限りふき取ることがベスト。

「どうだ？欲しいものがあつたら極力用意するぞ」

「………のどが、乾いちやって……」

「分かった。スポーツドリンクでいいよな？」

確かに熱があつて、汗もかいていれば水分補給は大事だ。

「待って……」



購買か自販機で買ってこようと思ったとつとしたときに、瑞希に手をつかまれた。

「水道の水でいいですから……傍にいてください……」  
「……わかった」

コップに水を注いで瑞希に手渡す。

「ゆっくり落ち着いて飲めよ」

「ありがとうございます……」

水を飲んで落ち着いたので、瑞希は寝てしまった。

「はぁ……Fクラスか……」

後悔はしていない。

Aクラスにいければそれがベストだけど、瑞希と一緒にいたほうが楽しいから。

「まあ奪い取ればいいか……」

二年生になれば『試験召喚戦争』で、他のクラスの設備を奪える。それにかけてみるしかないよな……

「真琴君……」

「……起きてたのか。少し眠ってもいいぞ」

「あの、ごめんなさい……私のせいで……」

「そのことなら気にすんな。オレは一人でAクラスに行くより、瑞希と一緒にいる方がいいんだから」

「でも……」

「だからいいんだって。それに約束は守る」  
「????」

瑞希はわけが分からないという表情を浮かべている。

「二年になれば試験召喚戦争で設備を奪える。オレが瑞希をAクラスに連れて行く」

「真琴君……私は、真琴君のこと……」

「いいから寝てる。気分が良くなったら言えよ？タイミング見つけて帰るんだから」

「……………わかりました。傍にいてくださいね？」

「ああ、約束する」

「……………手」

「？」

「手、繋いでください」

「ああ、いいよ」

そう言っつて瑞希が差し出してくる手を握る。  
まだ熱があるな。手が熱い。

「ゆっくり休めよ。オレのことは気にしなくていいからさ」

「はい……………。ありがとうございます……………」

瑞希は今度こそ本当に寝たみたいだ。

「そつえば瑞希の寝顔見るのは久しぶりかもな……………」

居候させてもらってる身とは言え、それでも幼馴染だ。  
お互いのいいところは知っている。

「瑞希……一年間よろしくな」

## 第2問 史上最悪な自己紹介（前書き）

本編の真琴ととの相違点なんです、

- 1・転校はしていない
- 2・瑞希の家に居候
- 3・弟はいない設定
- 4・瑞希の料理に耐性アリ
- 5・過去のある事件に大きく関わっている
- 6・瑞希が傍にいないと自殺願望に刈られる
- 7・機会音痴ではない
- 8・本編の真琴より点数がいい（12000点台常連）
- 9・かたくなに人と接する事を拒む。
- 10・両親は死んでいる。

こんな感じですよ。

6については物語の確信に迫るので後々語る予定。

バカテストは時々まとめて入れます。

## 第2問 史上最悪な自己紹介

真琴SIDE

「ごめんなさい。私のせいで時間ぎりぎりに……」  
「いいって。瑞希がいなきゃ、オレも出かけられないんだから」

今日から文月学園の新学期。

……… 初日に瑞希が寝坊して遅れている。

「遅いぞ、姫路に峰嶋」

「お、おはようございます……… 西村先生」

「瑞希、大丈夫か？あ、鉄人か。おはようございます」

この筋肉隆々で黒い肌に大きな声。

補習担当の西村宗一こと鉄人である。

「二人揃って遅刻とはいつも一緒だな」

「しょうがないじゃないですか。オレは居候の身だし、瑞希がいないと危ないですから」

「？ どういうことだ？」

「あー……… ほつといてください。人に言いたいような事じゃないですから」

鉄人は首をかしげる。

正直このことを人に話したら警察沙汰だし、瑞希の傍にいられなくなる。

「それよりもこれだ」

そう言っつて鉄人はオレと瑞希にそれぞれ封筒を渡してくる。

「振り分け試験の結果ですか？どうせFクラスでしょう？」

「まあな。しかし峰嶋、お前まで退席することはなかったんだぞ？」

「だから言っつてるでしょう。オレは瑞希が傍にいてくれないと危険な存在なんです。それに、瑞希がいなければAクラスもFクラスも変わらないですから」

「その危険の意味が俺には分からんのだが」

「……今度誰にも言わないという約束でなら話しても良いですよ」

「……真琴君……！」

オレの言葉に瑞希が驚く。

「いいんだ。鉄人はそういうことには口が堅いから。それに、ヘンな誤解をされかねないしな」

このやり取りを聞くとオレが瑞希にぞっこんみたいに見えるからな。事実上はそうなんだけど。

「まあいい。話したくないなら俺も無理には聞かん。それより早く行け」

「「分かりました」」

そう言っつて瑞希と一緒に校舎の中に入っていく。

「アイツももう少し人と接してくれるといいんだがな……」

そう呟く鉄人の声はオレに聞こえることはなかった。

「すげえな……」

「すごいです……」

Fクラスに行く途中で通りかかったオレたちはAクラスの教室に見

とれていた。

「リクライニングシートに個人エアコン……」

「ノートパソコンに冷蔵庫ですか……」

二人でAクラスの設備に釘付けになっていると、一人の女生徒が話しかけてきた。

「あなた達、峰嶋真琴君と姫路瑞希さんでしょう？」

「……そういうアンタは？」

「アタシは木下優子。あなた達と同じAクラスよ」

オレたちと同じ？

ああ、オレ達が途中退席したことはみんな知らないのか。

「いえ、私達は……」

「瑞希。それ以上言う必要はない。コイツはただの敵だ」

「は？何言ってるの？君なら間違いなく学年主席……」

「敵と会話する必要はない。瑞希、行こう」

「あ、はい」

「????? なんなのよ……」

オレたちはFクラス所属だ。

見ている。Aクラスの設備、奪い取ってやる。



「これがFクラス……」

「流石に酷過ぎませんか……？」

旧校舎だからある程度ぼろいとは思ってたけどな……

「ここまでとは……」

「あの、真琴君」

「ん？なんだ？」

「もし、できればですけど、Fクラスの人たちと仲良くしてくれませんか？」

Fクラスの人と仲良く？

冗談じゃないな。只でさえ他人は嫌いなのに……  
でも……

「分かった。極力頑張ってみる」  
「はい！じゃあ入りましょう！」

嬉しそうに笑う瑞希。

なんだか申し訳なくなってくる。

オレのせいで不自由な人生を歩むことになってしまったアイツが……

「あの、遅れてすみません……」

瑞希がそういいながらドアを開けると、

『『女成分じゃー！ー！ー！ー！』』

大声が飛んできた。

「あ、あの、真琴君……これは……」

「さっぱり分からないが瑞希にとって良い物ではなさそうだ」

コイツらのテンションだとそのまま瑞希に襲い掛かってきそうだ。  
なんか危ないので瑞希を後ろに隠す。

「おい！なんで女の子を後ろに隠すんだー！」

「独り占めすんな！」

「ガンホー！ガンホー！」

……コイツらと仲良くしろって無理だろ……

「ああ、丁度良かったです。峰嶋君と姫路さんも自己紹介してください」

声をかけられた。

えと…福原先生だよな。

初老で幸薄そうな顔の先生。

「はい、峰嶋真琴です。1年間よろしく」

「えっと姫路瑞希です。よろしくお願ひします」

こんなんでいいのか？

「えっと、質問です！」

「？なんだ？」

「どうしてここにいらっしゃるんですか？」

……………何だコイツ。

オレと瑞希がここにいちやまずいのか？

「えっと、振り分け試験で高熱を出してしまいました……」

「瑞希、何も答える必要は……」

「仲良くするって約束ですよ？」

「ぐ……」

無理だと思っ。

オレは人付き合いが苦手だがこれはどんな奴でも引くだろう。

『そういえばオレも熱（の問題）が出たせいでFクラスに』

『ああ、化学だろ？あれは難しかったな』

『俺は弟が事故に会ったと聞いて実力を出し切れなくて』

『黙れ一人っ子』

『前の晩、彼女が寝かせてくれなくて』

『今年一番の嘘をありがとう』

ほらな、バカばかりだ。

「……………オレは瑞希の付き添いで退席」

『異端者を殺せ！！』

「……………瑞希、やっぱ無理だつて」

異端者って何？ってツツコミがまず出てくる。  
もう付き合つてらんないな……………

『あいつ、姫路さんを名前で呼んだぞ！』

『異端者だ！殺せ！』

『学年主席レベルでも許せるか！』

要するに逆恨み？

ああ、見苦しい。これだから人と付き合うのは嫌なんだ。

自分の言い分だけを正当化していつもオレを悪者扱い。付き合つて  
られるか。

「真琴君……………我慢してください……………」

「分かってるよ……………相当イラついてるけどな……………」

そう言った瞬間にカッターナイフが二本飛んできた。  
まあ簡単につかんだが問題はそこじゃない。

「……………これ投げた奴、出て来い」

「……………」

「出てこなければ腕づくで自白させる」

「「「須川と横溝です！」「」」

ほう。いい度胸じゃないか。

「おい」

「「ヒッ！」「」

「瑞希に当たったらどうするつもりだ？」

「「……………」

須川と横溝？は黙っている。

「やるならオレ一人を狙え。瑞希を攻撃したらブチ殺す」

「「すいませんでした……………」

須川と横溝は萎縮している。

次やったらほんとにキレそうだ。

「瑞希、怪我ないか？」

「大丈夫です」

そう言って二人で奥のほうの席につく。

「あのさ、姫——「姫路」

席についた瞬間に瑞希に話しかけようとした男子とそれを遮る男子。

「あ、はい！なんですか？えーっと……………」

「坂本だ。坂本雄二。クラス代表だ。よろしくな」

「あ、はい。よろしくお願いします」

「峰嶋も、よろしくな」

「……ふん」

相手にしたくもないな。

Fクラスってだけでも十分最悪なのに、さっきのバカ騒ぎを見せられたらな。

「クラス代表って言うから戦争のときは指示してくれてかまわない。戦争に関係がないときは話しかけないでくれ」

「おっと、嫌われたか？」

「真琴君、仲良くするって約束ですよ？」

「無理だよ。さっきのバカさ加減じゃな」

「？ なんだ、仲がいいな」

何だコイツ。ずかずか人の事情に踏み込んできやがって。

「お前に話すことは「私と真琴君は、一緒に暮らしてるんです」……何もない」

あまり人に話していい気分がする話じゃないんだよ。これは。

『姫路さんと同棲だと!?!』

『うらやましい! 殺すぞ!』

うらやましい?

殺されたいのかコイツラは。

人のこと何もしらねえ雑魚の癖して……! !

「……………」

「ま、真琴君、抑えてください」

「……………分かった」

「どうしたんだ？」

「代表。あまり踏み込まないでくれ。思い出したくないんだ」

「……………そうか、それは悪かったな」

嫌でも忘れられないのに、人に言われるなんて最悪だ。

これだから何も知らない奴と一緒に嫌なんだ。

「それで姫路、体調はどうなんだ？」

「あ、それは僕も気になる」

「あ、吉井君！吉井君もFクラスなんですか？」

「うん、そうだよ。一年間よろしくね。そっちの君も」

「言わなかったか？試召戦争以外の時にオレに話しかけるな。迷惑だ」

ずかすか踏み込んでくる他人はほんと迷惑なんだよ。

何も知らないくせにオレの傷をえぐるような事ばかりしてきやがって…

「なんだと！？人が親切にしてるのに……………」

「その親切が迷惑なんだ。話しかけるな。オレは他人に興味はない。

お前にも、坂本にもだ」

「なんだと！？おまえ、いい加減に……………」

「よ、吉井君落ち着いて！真琴君は……………」

「姫路さん！止めないで！コイツに分からせないといけないんだ！」

分からせる？

なにも知らないくせに良くそんな大口叩けるなコイツは。

「うるさい黙れ。迷惑だと言っただろう」

「なんだと!？」

「吉井君、真琴君がこうなのは訳があるんです!だから落ち着いて

……」

「訳？」

「お前が聞くことじゃない。瑞希、頼むから誰にも話さないでくれ」

「分かってます。真琴君が話したくないなら、私も話しません」

「……悪いな。迷惑かける」

「そんなことないですよ」

いや、瑞希はこう言ってくれるがオレの存在は瑞希にとって迷惑と邪魔でしかない。

はやく治さないといけないのに……

「それで峰嶋。お前は試召戦争に興味があるのか？」

「興味も何も、やるつもりだ。Aクラスの設備を奪う」

「お前も考えてたのか」

「約束だからだ」

「約束？」

「ああ、瑞希はオレがAクラスまで連れて行く。誰にも邪魔はさせない」

瑞希をAクラスまで連れて行く。

本来入るべきだった場所までオレが連れて行く。

たったそれだけのこと。

「ほう…随分と姫路に対して過保護だな」

「大切な存在だ。オレがオレであるために、オレが生きているためにな」

「? どういうことだ？」



「この話はここまでだ。で、やるのか？」

「当然だ！」

「ならオレも乗らせる。オレがFクラスを勝たせてやる」

「期待してるぜ学年主席」

ここで坂本の自己紹介の番が来た。

「坂本」

「分かっている」

アイツは恐らくここで試験召喚戦争の事を言うのだろう。

坂本雄二……不思議な奴だ。

「真琴君、坂本君と仲良くなったんですね。良かったです」

「戦争の間だけだ」

「ふふっ」

「何がおかしいんだ？」

「何でもないですよ」

？ なんなんだ？

『俺たちは、Aクラスに対して試験召喚戦争を仕掛ける！』

これがオレたちの戦いの始まりだった。

### 第3問 学年主席の事情

真琴SIDE

「俺たちは、Aクラスに対して試験召喚戦争を仕掛ける！」

Fクラスの教室に響く坂本の声。

「勝てるわけない」

「今より酷くなるのは嫌だ」

「姫路さんがいたら何もいらぬ」

最後のラブコール野郎は別として、まあコイツらの言い分は概ね正しい。

「そう言うな。実はこのクラスには、Aクラスに勝てる要素が集まってるんだぞ」

「ありえない」

「勝てるわけがない」

「坂本は気が狂った」

…気が狂ったは言いすぎだぞ。

少なくとも坂本の言ってることは正しいと思う。

「なら説明してやろう。康太！いつまでも姫路のスカート覗いてないで前に来い！」

「は、はわっ！」

「……………！！（ブンブン）」

「殺されたいか？」

何をしてるんだコイツは。

「みんな良く聞け。コイツが有名な寡黙なる性識者だ」

ムツツリーニ？なにそれ

「な…奴がそうだというのか!？」

「初めてみた!」

「みる…まだ除きの証拠を隠そうとしてるぞ!」

「ああ、ムツツリーニの名に恥じない姿だ!」

………みんな知ってるのか？

「坂本、ムツツリーニってなんだ？」

気になるので質問する。

「「「!?!?!」」」

「え？なに？」

「おい、ムツツリーニを知らないのか？」

「お前本当に男か？」

「学年主席でも知らないことがあるんだな」

「おい！なんなんだよムツツリーニって!」

ムツツリーニ？ただのムツツリスケベとかだったら怒るぞ!？

「ようはただのムツツリスケベだ」

「よし、殺すか」

「……………！！（ブンブン）」

「否定してるぞ」

「そついう奴だ」

なんなんだよ。ムツツリスケベがAクラスに勝てる要素？

坂本、やっぱり狂ったか。

「木下秀吉だっている」

「木下秀吉って演劇部のホープの…」

「何かしらやってくれそうだ」

木下秀吉と呼ばれた奴が立ち上がって照れている。

男子の制服着てるけど男みたいな…………あれ？

「おい木下優子。なんでお前が男子の制服着てFクラスにいるんだよ。お前はAクラスだろ」

「お主、わしと姉上を間違えておるな？」

「姉貴？」

「ああ、コイツは木下優子と双子だ」

「……………なるほど、悪かったな」

「気にしなくていいのじゃ」

木下弟に謝るとまた座る。

もうヘンな奴は嫌だ。

普通に勝てる要素を紹介して欲しい。

「それに俺たちには姫路と峰嶋がいる」

「姫路さんはうれしいけど峰嶋はムカつく奴だぞ」

「いなくていい」

バカどもが騒ぎ出す。

「オレだつてお前等のために戦うなんざ嫌だ」

「まあ、みんな落ち着け。姫路に峰嶋、お前等の最高得点を教えてくれ」

坂本が仲裁に入る。

最高得点？確か……

「あ、私は確か5633点のはずです」

「流石姫路さん！」

「峰嶋だつて大して変わらないだろ」

「ちよつとやそつとじゃ驚かねえぞ」

好き勝つて言つてろ。

確かオレの点数は……

「16873点だ」

「「「16000!?!?!」」」

「流石真琴君ですね。私の3倍なんて」

「調子が良かったただけだ。瑞希の点数だつてずば抜けてるだろ」

「お、おかしいよ!?!16000なんて!?!」

「? たしか吉井だつたか？オレからすれば12000は普通だぞ」  
「絶対おかしい!?!」

そんなことは言われなくたって分かっている。

「聞いてのとおり、峰嶋の点数は教師クラスの倍をいくんだ。一人でAクラス10人分くらい戦力になる」

「坂本。Aクラスくらいオレ一人で潰してやるから安心しろ」

「な？頼もしいだろ？」

「確かにすごいな……」

「16000なんて初めて聞いたぞ」

「やっぱ学年主席はちがうな……」

オレが学年主席だったのは去年の話だけだな。

「当然オレも全力を尽くす」

「坂本。お前頭いいのか？」

「ああ。過去に神童と呼ばれていたぞ」

「そうか！なら実力はAクラスが三人もいるのか！！」

Aクラス程度と思うな。

教師が群れになって掛かってきても勝つ自身はある。

「それに吉井明久だっている」

しーん……

「ちよつと！そこで僕の名前を出す意味あるの!？」

「瑞希。コイツは何かすごいのか？」

「さあ……私も知らないです」

なぜ坂本がこんな典型的なバカの名前を出したかさっぱり分からない。

「知らないなら教えてやる。こいつは“観察処分者”だ  
「観察処分者だと！？それって――」

「バカの代名詞だろ」「」

そのとおり。

「ち、違うよ！ちよつとお茶目な16歳につけられる称号で――」

「ああ、そのとおりだ」

「肯定するなバカ雄二ー！」

「なるほど。通りでバカだと思ったよ」

「うるさいなー！」

そう思うなら少しは行動を慎めバカ。

「あの、観察処分者ってなんですか？」

「ああ、瑞希は知らないのか」

「素行は最悪、勉学への興味なし」

「成績は最悪、学校生活を送るのに最も向かない生徒に送られる最低最悪の称号だ」

「みんなして酷いー！」

ああ、このバカはいじってて面白い。

なんかコイツのこと、もつと知ってみたいな。

「へえーすごいんですね」

「そうだよ姫路さん。僕の召喚獣は物理干渉できるんだ」

「バカの代名詞で調子に乗るな。瑞希、よつはコイツは学園が認めるクズってことだぞ？」

「吉井君はクズなんかじゃないです」

「まあそうだな。使い道はある。悪いな吉井」

「迷惑なんじゃなかったの？」

「気が変わった。お前のことは面白そうだから見てやる。ついでに坂本もな」

コイツは今まで見てきたどのタイプの人間とも違う。ある意味初めて他人に興味を持ったな。

「物理干渉が出来るってことは、召喚獣の力持ちが発揮されるんですよね？」

「フィードバック付きで攻撃されると痛いかな」

「雄二！余計なことじゃないで！」

「いてもいなくても変わらないだろ」

「そんなことな」ああ、そのとおりだ「うるさい雄二ー！」

お前がうるさいぞ吉井。

「だがAクラスに勝つためには必要なことがある」

「オレと瑞希の点数だろ」

「ああ。そういうことだ」

オレと瑞希は振り分け試験で途中退席したから総合科目で0点なんだよな。

「私達は途中退席で0点ですから……」

「今すぐ勝とうとすると、どこかと戦争するしかないな」



一度試召戦争すれば戦後回復テストで点数の補充が出来るからだ。

「ならEクラスが妥当だろう。明久、Eクラスに宣戦布告に行つて来い」

「えー？下位勢力の使者つて酷い目にあうのに？」

「問題ないさ。俺を信じろ」

この状況で坂本を信用する奴なんざいないだろ。

「分かった。行つてくるよ」

「……………」

あいつはバカなんだな。

「瑞希、アイツはバカなのか？」

「……………わかんないです」

「まあ、バカなんだろうな……………」

改めてFクラスには不安しかないな。  
設備を変えるだけではダメな気がするぞ。

「姫路さん、得意科目つてある？」

「え？えーつと……………」

「あ、ウチは島田美波。美波でいいわよ」

「じゃあ私も瑞希で良いです。私は数学が得意ですけど……………」

「ウチと一緒にね！峰嶋君は？」

「その前にひとつ聞いていいか？」

「何よ？」

オレが聞きたいこと。それは……………

「女子なのにFクラスなのか？」  
「ウ、ウチはドイツからの帰国子女で、日本語が読めないから数学以外の点数が低いだけよ」

ああ、数学なら証明問題以外は日本語読めなくてもいいからか。  
でも……

「言い訳だな」

「なっ…なんですって!？」

「言い訳に過ぎないな」

「何ですってええ!？」

「悪いがオレなら問題文がドイツ語でも今の点数取る自信があるぞ」

「何が言いたいのよ!？」

「文化の違いを言い訳にするなっということだ」

「しょうがないでしょ!アンタこそ自慢のつもり!？」

「聞きたいなら言っつてやるがオレは8ヶ国語喋れるし読めるからな」

「……………っ!!」

「それからオレの得意教科は暗記科目全般だ。完全記憶能力者だからな」

完全記憶能力。

それがオレが学年主席にいる理由。

これがなければAクラス下位くらいの点数しか取れないからな。

「本当の頭のよさならオレより瑞希のほうがよっぽど上だ」

「よく分かったわ。あんたが嫌な奴だっつて事がね!!瑞希、あつちで話しましょう」

「!!! ちょっと待て!!!」

「何よ?」

「……………いや、大丈夫そうだ。行ってきてくれ」

「真琴君、大丈夫ですか？」

「多分……………大丈夫だ。今変化がないなら……………」

「危なくなったら戻ってきますからね？」

「極力抑えるがいざとなったら頼むよ。それからこのこと、島田に話してやれ」

「！？ いいんですか!？」

「でないとアイツは納得しないだろ」

「……………分かりました。美波ちゃん、あっちでお話しましょう」  
「なんなのよ？」

「少しくらいなら離れても大丈夫か……………」  
「頼むから収まっててくれよ……………」

瑞希SIDE

「で、なんなのよ。峰嶋のあの怯えようは」

「あれは、真琴君の病気なんです」

「病気？」

「はい」

真琴君の心の病気。

過去に巻き込まれた事件のせいで、あるトラウマが出来てしまったんです。

「理由はあんまり言えないんですけど、私が傍にいないと真琴君、自分で自分を殺そうとするんです」

「！？ それって自殺って事!？」

「はい。今は落ち着いてて大丈夫みたいですけど、酷いときは視界から外れただけでも暴走してリストカットしたり……」

「なんでそんなことになってるのよ……」

「今まで何度も暴走して、本当に死にかけてたこともあるんです……」

リストカットから始まり、飛び降りや自分の首を絞めたり、とにかく色々な方法で自分の命を断ち切ろうとするんです。

「それで、なんで瑞希が傍にいと収まるのよ？」

「それは……よく分かんないんですけど……」

なぜそういう風に暴走するのか、なぜ私が傍にいと収まるのか、  
なにもはつきりしたことは分からないのが現状です。

「……峰嶋は瑞希のこと好きなのかもね」

「ふえ！？な、何を言ってるんですか！？」

「だってそういうことじゃない？好きな人が傍にいと落ち着くっ  
ていうやつ？」

「……そんな訳ないです。真琴君が心の底から人を好きになる訳な  
いんですから」

「どういづことよ？」

「だって、真琴君は……」

「………これ以上はウチが聞いていい話じゃなさそうね」

「そうしてもらえるとありがたいです……」

「瑞希は峰嶋のこと好き？」

「ふえ！？そ、そんなの当たり前です！あ、じゃなくて、ええと…  
…」

ひ、ひどいです……。

真琴君のことどう思ってるか聞くなんて……。

「思い切って告白してみたら？」

「告白なんて無理です……きっと嫌われちゃいます」

「そんなことないわよ。告白して嫌われてるくらいなら、あんなに  
優しくないでしょ」

「そうですけど………」

真琴君の過去を知ってしまったら、そう簡単に告白なんて出来ない  
んです。

言ってしまったら、真琴君の重荷を増やす事になりかねないから……

「ほら、吉井が戻ってきたみたいだからウチらも戻るわよ」

「……美波ちゃん！」

「なに？」

「少し、聞いてくれませんか？」

真琴君の過去のことを。

**第3問 学年主席の事情（後書き）**

次回は真琴の無意識な自殺願望の理由です！

## 第4問 過去

あれは小学校3年生の夏だ。

普通に学校に行つて、普通に家に帰つて、普通に1日を終えるはずだつた日だ。

それなのに、どうしてこんなことになつたか分からない。

オレたちが何か悪いことをしたのか？

よく分からないがオレが狂つたのはあの時だ。

それだけは間違いない。



「瑞希ちゃん、今日帰ってきたテスト、何点だった？」

「98点だよ。真琴君は？」

「へへー、100点だ。今日はオレの勝ちだね」

二人で一緒にいる。

ただそれだけのことははずなのに、お互いの点数を言い合ったり、一緒に笑ったり、そういう時間がとても大事だった。

「じゃあまた明日ね」

「うん。バイバイ」

家に向かいだったオレ達はいつも一緒に帰ってた。

その日も何も変わらないはずだった。

だけど、なくちゃならないものがなくて、あつて欲しくないものがあつた。

「ただいま……………あれ？母さん？」

いつもなら、『おかえり』と返してくれる母さんがいない。  
鍵は開いてたから、いるはずなのに。

「母さん……？」

今の電気が付いている。  
なら家にいるんじゃないか。  
そうおもって今のドアを開けて、入った。

「かあ……さん……」

いつも優しくかった母さんはそこにはいなかった。  
いるのは……いや、あつたのは、母さんと父さんの形をした肉塊だ  
った。  
床を赤く染めて、ただの肉の塊になっていた。

「な……なんだお前……」

不意によこから声がした。

「ガキか……殺していいな……」

顔は分からない。

手に血で染まった包丁を持っている。

コイツが父さんと母さんを殺したのか？

「し、死ねえ！！」

突然包丁をオレの心臓に刺そうとしてきた。  
そこから先はどうやったのか分からない。  
分からないがオレはその男を……

殺した。返り討ちにした。

「……………なんだこれ」

どうやったのかはよく分からないが、とにかくオレはこの男を殺したのは事実みたいだ。  
殺される瞬間に悲鳴を上げたのも覚えていた。

「真琴君……………何かあったの？」

悲鳴を聞いてきたのか、彼女は家のドアを開けて入ってきた。

「え……………」

小学3年生の女の子にはキツイ映像だろうな。

大人3人の死体と、床一面に広がる血と、包丁を持って返り血を浴びた幼馴染がいるんだから。

「逃げて……………」

「え………?」

「瑞希ちゃんは何も見えてない。このことは忘れるんだ」  
「でも………」

気が狂ったのかは知らない。

ただ自分の手首を切って、自殺を図った。

瑞希ちゃんの声が聞こえた気がしたけど、そこから先の記憶はない。

「なによそれ……じゃあアイツは、自分の両親を殺した男を殺して、自分も死のうとしたの!？」

「……私が傍にいて、すぐに病院に運ばれて命だけは助かったんですけど……」

それから毎日のように手首を切ったり、飛び降りようとしたり、舌を噛み切ろうとしたり……

「その頃はまだ子供ですし、状況から見て正当防衛って事で特に何もなかったんですけど……」

「そんなことがあったんだ…… ? それが瑞希が傍にいるのと同じような関係があるわけ?」

「それが分からないんです。今まで見たこと無いって……」

「普通なら施設に送られるところでしょうけど……」

「私の家で引き取ったんです。真琴君は遠縁もいなかったですし、血の繋がりがある人は両親だけでしたから……」

人を極端に避けるのも、無意識にあのときのことを思い出しているから。

自分がまた人を殺してしまうんじゃないかという恐怖。

口では強がってはいるけど、本当は誰よりも人を攻撃できないはずなのに……

「まあ分かったわ。とりあえず戻りましょ。坂本たちも待ってるわ」

「は、はい!それから美波ちゃん、このことは誰にも……」

「分かってるわよ。誰にも言わないから」

「お願いします。私が言ってしまったことなのに……」

「気にしなくていいってば。それより召喚戦争よ！」  
「そ、そうですね！頑張りましょう、美波ちゃん！」

でも、召喚戦争で本当にAクラスに勝てるんでしょうか……？  
真琴君一人ならBクラスは余裕でしょうけど、私達が足を引っ張る  
ことにならなければいいんですけど……

いえ！真琴君だけに頼らないで、自分でも頑張らないと！

「瑞希ー、置いてくわよー」

「あ、今行きますー！」

#### 第4問 過去（後書き）

真琴がBクラスを単体で潰せるのは点数以外にも腕輪の能力があるからです。

感想お待ちしております！

**第5問 食べ物で死線を超えるって実は結構簡単だったりする(前書き)**

対戦相手はEクラスです。

アニメよりですね。



第5問 食べ物で死線を超えるって実は結構簡単だったりする

真琴SIDE

「もういいのか？」

「はい。もう終わりましたから。そっちはどうですか？」

「吉井がEクラスのやつ等にボコボコにされて帰ってきたところだ」

たいてい下位勢力の使者は酷い目にあう。  
分かってていく奴が悪いけどな。

「みる雄二！やっぱり使者への暴行は予想できたじゃないか！！」

「なんだ生きてたのか。死者になってくれて助かってたんだが」

「雄二なんて友達じゃないやい！」

いや、坂本はお前のことを友達とは思ってないだろう。

「お前は友達じゃないからな」

ほらな。

「で、いつから開戦予定だ？」

「峰嶋か。今日の午後って言ってたぞ」

「なら先にお昼ですね」

「明久、今日くらいはまともなもの食べよ？」

「？ 吉井君はお昼食べないんですか？」

「一日三食とらないと健康に良くないぞ」

「安心して姫路さん。ちゃんと食べてるから」

食べてるのか？

じゃあ坂本の言ってる言葉はどういう意味だ？

「お前……主食は塩と水だろう？」

「失礼な！砂糖もちゃんととってるよ！」

「吉井君……塩と砂糖は食べるとは言わないですよ」

「舐めるが正解だな。というかお前はアリか？」

塩と砂糖が主食の人間は初めてみた。

というかよく生きてられるなこいつ。

「あ、なら皆でお弁当食べませんか？今日はちょっと多めに作ってきちゃったので……」

と言って瑞希は大きな包みをだす。

重箱？作りすぎというレベルではないだろう。

「いいんじゃないか？なら俺は飲み物買ってくるから屋上にも行っててくれ」

「あ、ウチも行くわよ」

「じゃあ雄二に島田さん、よろしくね」

坂本と島田が教室から出て行く。

「じゃあオレたちも行くこうか？」

「はい！」

「わしも一緒にいいかのう？」

「えーっと……木下弟か」

「勿論！秀吉なら大歓迎さ！」

なぜ吉井は秀吉なら大歓迎なんだろう？

まさかアイツを女だとも思ってるのだろうか？

確かに見た目は女だが男子の制服着てる時点で男だろ。

「……………（サスサス）」

「ムツツリーニ、豊の後ならもう消えてるよ？」

「……………！！（ブンブン）」

「いや、いまさら否定してもムツツリーニがHなのは知ってるから」

「……………！！（ブンブン）」

「何色だった？」

「水色」

即答だった。

「うわぁ……日差しが丁度いいね……」

「風もあって気持ち良いですね」

「そのせいで鼻血出して死んでる土屋がいるけどな」

屋上は日差しも丁度良くて風もあって気持ちよかった。

「……シートもある」

「ムツツリーニ、準備いいね」

その準備の良さはどうかと思う。

「じゃあ雄二たちには悪いけど先に食べちゃおうか」

そう言って弁当（重箱）を広げる一同。

中に入っているのはエビフライから玉子焼きまで見た目はとても綺麗な料理ばかり

「「「おおー」「」」

「みなさんいっぱい食べてくださいね（満面の笑みで）」

「うん！僕はこのエビフライを——」

吉井が取るうとしたところで土屋に邪魔され取られてしまう。

「あつ！ずるいぞムツツリーニ！」  
「おい土屋、あんまり無防備に食べると……」

パク ガタガタガタガタ

「危ないから注意しろって遅かったか……」

「「！？」」

「じゃあオレも頂くかな？」

「真琴君、土屋君は……」

「瑞希の料理は破壊力バツグンだからな。オレでもない限りは普通のリアクションだな（パク）」

「あつ！峰嶋君！危ないよ……！」

といわれても食べなれて耐性が付きまくってるから特に問題は無い。

「……………大丈夫なの？」

「ああ、なんともない」

「おぬしはどんな身体をしておるのじゃ……………？」

まあ当然の疑問だろうな。

今まで何度死線を彷徨ったかは知らないが。

「……………姫路さん、何入れたの？」

「今日は濃硫酸と硝酸カリウムですよ」

「……………峰嶋君、君ってすごいよ」

「そうか？普通だけだな。すごいときはもっとすごい。今日は控えめなほうだ」

人一人ノックアウトしておいて控えめもヘツタクレも無いが。

「……姫路さん、とりあえず薬品を料理に持ち込むって事は間違いだって気づいて欲しいな……」

「でも真琴君はいつも食べてくれますよ？」

「それは峰嶋がおかしいだけなのじゃ……」

それについては同感だ。

オレ以外に瑞希の料理を苦も無く食べる奴はいないと言っていていいだろう。

「おー、うまそうだな。どれどれ……」

と坂本がやってきて玉子焼きをひとつ摘み上げる。そして口に放り込み倒れる。

パク ガタガタガタガタ ガシャーン

「おお、坂本もノックアウトか」

「坂本君……私の料理……美味しくないですか？」

もう既に美味しい美味しくないの次元ではない。

オレは食べれるし害もないし普通にうまいと思うがコイツらにとっ

ては兵器以外の何物でもないだろう。

「い……いや……大丈夫だ……ちょっと足が攣ってな……」

坂本が目で『毒を盛ったな？』と訴えかけている。  
残念ながら瑞希の実力だ。

「あれ？坂本どうしたの？」

「あ……足が……つってな……」

「目がうつろだぞ」

「そうなの？坂本って鍛えてるように見えるけど？」

コイツは間違いなく餌食になるな。

オレが今のうちに全部食べたほうが安全かもな……

「み……峰嶋は……平気なのか……？」

「ああ、オレは食べなれてるからな」

「やっぱりおかしいのじゃ……」

そういうな木下弟。

オレだって最初は死にかけたぞ。

「島田さん、さっきそこに虫の死骸があつたよ」

「ええ！？早く言つてよ！手洗つて来るわ……」

あれ？島田は追い出すのか？

「そして……姫路さん！アレは何だ！？」

「え！？なんですか！？」

と吉井があさつての方向を指差し瑞希もそつちを向く。  
何がしたいんだ？

「!?!? なにやってるんだこいつ!?!?」

見ると吉井が瑞希の料理を片っ端から坂本の口に押し込んでいた。

「お主……存外鬼畜じゃな……」

オレも心からそう思った。



「で、なんでEクラスなの？」

手を洗って（命を救われて）戻ってきた島田が坂本に聞く。

「テストを受けるためだ」

「テスト？」

「戦後回復テストを受けて、振り分け試験で0点だったオレと瑞希の点数を戻すって言いたいんだろう？」

「ああ、そのとおりだ」

「私達は途中退席して点数が無いですから……」

「Eクラス戦は決着つけなくても和平交渉とかで終わらせられないか？」

「……無理だな。Eクラスは猪突猛進なやつが多い。こつちの話など聞いてくれないだろう」

Eクラスってというと体育会系クラスか。

猪突猛進はいいすぎだと思っが代表が代表だけにしょうがないか。

「でも雄二、Eクラスとは言っても格上だよ？」

「バカ明久、回りよく見てみる。お前の周りには誰がいると思ってんだ」

吉井は少し悩んでから、

「美少女が二人とバカが二人とムツツリが一人と嫌な奴が一人いるね」

ああ、妥当な評価だろうな。

「だれが美少女だ！」

「……………（ポツ）」

「ええ！？君達が美少女に反応するの！？」

もういつそのこと全員バカでもいい気がしてきた。

「おちつけ。美少女 瑞希と島田、バカ 坂本と木下弟、ムツツリ  
土屋、嫌な奴 オレだろうな」

「何言ってるのさ！美少女と言ったら姫路さんと秀吉に決まってる  
じゃないか！島田さんみたいながさつで乱暴な腕がねじ切れるうう  
うー！！」

あ、逆鱗に触れたな。

「そろそろ時間だ代表」

「お、おう……………」

さて、まあある程度の手ごたえは期待させてもらっかな。

第6問 EとFの差って案外なかったりする(前書き)

Eクラス戦ですよ。

アニメ見たいにはならないですよ。

第6問 EとFの差って案外なかったりする

「開戦じゃー！ー！ー！」

「「おおー！ー！」

坂本の合図で一斉に気合が入る。

「すごいな……ただの前哨戦みたいなもんだってのに」

「皆さん気合いっぱいですね」

「お前らはウチのエースにしてワイルドカードだ。補充試験、頼むぞ」

補充試験は数学。

瑞希は数学を得意科目としているがオレはどっちかって言うと暗記科目のほうが点数はいい。

「んじゃさつさと始めるか」

「そうですね」

開戦して試験を受けられるようになったのでさつさと試験開始。

「Eクラスが来たぞ！」

「長谷川先生、お願いします！」

『承認します！』

数学担当長谷川先生が数学フィールドを展開する。

「島田美波行きます！試獣<sup>サモン</sup>召喚！！！」

「木下秀吉行くのじゃ！試獣<sup>サモン</sup>召喚！！！」

「……土屋康太、同じく！試獣<sup>サモン</sup>召喚！！！」

三人が召喚するためにサモンと叫ぶと、幾何学模様が出てくる。そこから『召喚者をデフォルメした召喚獣』が出てくる。

Fクラス	島田美波	数学	89点
	木下秀吉	数学	55点
	土屋康太	数学	27点

遅れてそれぞれの点数が表示される。

「三上美子、行きます！試<sup>サモン</sup>獣召喚！！」

Eクラスからも出てくる。

Eクラスからすれば利点の無いこの戦争は、さっさと終わらせたいものに過ぎない。

Eクラス 三上美子 数学 77点

「数学ならEクラスなんかには負けないから！！」

美波の召喚獣が三上を瞬殺する。

「こい！戦死者は補習だ！」

「て、鉄人！？いや！補習は嫌よ！助けて！！」

「こい！趣味は勉強、尊敬する人は二宮金次郎という模範的な生徒にしてやる！！」

「いやああー！！！！」

『……………』

「あら、Fクラスの癖に、強いんですね」

「……あなたのクラスの人、連れてかれてるわよ」

「まあしょうがないわ。私はEクラス代表中林宏美、サモン試獣召喚」

遅れて中林の点数が表示される。

Eクラス 中林宏美 数学 98点

明久SIDE

「雄二、姫路さんと峰嶋君が補充試験を終えるまで持ちこたえられるの?」

「微妙だな。EクラスとFクラスの差はそんなに大きくは無いが、それでも格上だ。力任せのパワーゲームじゃ押し切られるのも時間の問題だ」

「でも、そんなにすぐには押し切られないよね?」

『押し切られるー!!!』

とそこへ響く島田さんの声。

もう押し切られるの!?

「ゆゆゆ雄二!どうするの!?!」

「落ち着け明久。まだ押し切られたわけじゃない。あと少しなんだ」

落ち着けて言われてもしょうがないだろ!?

このまま押し切られたら雄二が討ち取られて3ヶ月間宣戦布告禁止になっちゃうんだから!

「仕方ないな。明久、お前も準備しておけ」

「……………分かった」

「その必要は無いぜ」

!?

「おう、終わったか?」

「よく時間を稼いでくれた。後は任せろ」



「行ってきますね」

美波SIDE

「クッ……やるわね……」

「あなたこそ、Fクラスにしては頑張ったんじゃない？」

圧倒的に押されていた。

流石にEクラス代表は強いわね……

Fクラス 島田美波 数学 9点

VS

Eクラス 中林宏美 数学 85点

「助太刀するのじゃー!!」

「……………同じく!」

「木下、土屋!」

Fクラス 島田美波 数学 9点

木下秀吉 数学 26点

土屋康太 数学 16点

VS

Eクラス 中林宏美 数学 85点

……………

助太刀してもらえるのは嬉しいけど三人で向こうと同じにもならな  
いなんて……………

「行くわよ!覚悟しなさいFクラス!」

「ぐ……何とか耐えるのじゃ！」  
「……………防御優先」  
「分かってるわよ！」

Fクラス 島田美波 数学 0点  
木下秀吉 数学 0点  
土屋康太 数学 0点

VS

Eクラス 中林宏美 数学 85点

「しまったのじゃ!!」

「……………不覚」

「クッ……………時間稼ぎが……………」

瑞希と峰嶋は間に合わなかったの!?

「何を待ってたか知らないけど、ここまでのようね」

「戦死者は補習！」

「て、鉄人!?!補習は嫌なのじゃ!?!」

『待たせたな!?!』

!?!?

峰嶋!?!間に合ったのね!

「? 何よ?あなたたち、峰嶋君と姫路さんね?Aクラスが何の用

？」

「ああ、知らないんだな」

「じゃあ私は周りの人たちと戦いますね？サモン試験召喚！」

「な、なに！？」

「とりあえず召喚しろ！！」

「さ、サモン試験召喚！」

Fクラス 姫路瑞希 数学 569点

VS

Eクラス 前線部隊10名 数学平均63点

近衛部隊 7名 数学平均78点

『『『『』、569点！？』』』』

すげい……

これが瑞希の本来の点数……

「じゃあオレもやるか。Fクラス峰嶋真琴が、Eクラス代表中林宏美に数学勝負を申し込む！サモン試験召喚！！」

「クッ……この二人がFクラス！？聞いてないわよ！！」

Fクラス 峰嶋真琴 数学 1328点

VS



真琴SIDE

「で、設備交換は無くてもいいんだよね？」

「ああ、代表が異論が無ければそれでいい。オレはAクラスの設備が欲しいだけだ」

そもそもこの戦争はあくまで点数を補充するための戦争。設備交換なんてする必要は無い。

「い、いいの……？」

「ああ、ただし条件付」

「条件……？」

「おい、峰嶋。条件って何だ？」

「まあ落ち着け代表」

条件つてのはAクラスの設備を手に入れた後に維持するための布石だよ。

「これから3ヶ月、Fクラスに宣戦布告をしない。この戦争は和平交渉で締結って形だからな。一応釘はさしておく」

「その程度のことでもいいなら守るわ」

「これで万事解決！今日は解散でいいよな？」

「あ、ああ……かまわない」

(コイツがAクラスの代表だったらと思うと末恐ろしいぜ……！)

「ん、じゃあ帰るか、瑞希」

「はい！じゃあ坂本君、吉井君、また明日、頑張りましょうね」

「お、おう。また明日」

「うん、じゃあね」

明日はAクラスに仕掛けるか……

土屋の保健体育の点数には驚かされたな……うまく行けばこうして

……

「あの、真琴君？」

「ん？なんだ？」

「今日、楽しかったですか？」

「まあな。試召戦争のおかげでな」

本音は吉井と坂本って言う存在が面白いと思うんだがな。

「吉井君と坂本君ですか？」

「！？ な、何をいつてるんだ！？」

「ふふつ、真琴君が他人に興味を示すなんて初めてですね」

「……………まあな。それより明日だ。うまく行けばAクラスの設備はオレたちのもんだ」

そして小さくガッツポーズ。

実はもう勝った気でいる。

「……………」

「どうした？具合でも悪いのか？」

「違います……………。もし私達が勝っちゃったら、Aクラスの人たちはあの教室で過ごさないといけないのになって……………」

「……………はあ」

小さくため息をついて、ばん、と瑞希の頭に手をのせる。

「瑞希、優しいのはいい事だ。オレも瑞希の優しさで生かされてる身だから良く分かる。けどな、これは戦争なんだ。Aクラスがオレたちをなめずに、きちんと準備してくればオレたちの勝算は低い。油断したらやられるんだ」

「わかってるんです。でも、やっぱり試験を途中退席した私がAクラスの設備がいいからって奪おうなんて、Aクラスの人たちに悪くて……………」

「瑞希、これは戦争だ。Aクラスの連中が設備を奪われるかもしれないなんてのは当たり前のことなんだよ。文月学園は力を示した生徒にのみ権利を与える。それを身をもって知ってるのがAクラスなんだ。奪われたくないなら守るしかないんだ」

「そう……………ですよね……………」

「Aクラスの設備は必ず手に入れる。その優しさは、Fクラスのや



つらに向けてやれよ」

「でもやっぱり……」

「戦争で優しさは命取りだ。これはどうしようもない現実だ。オレが瑞希のために戦うんだ。瑞希もFクラスのために頑張ればいいんだよ」

「……分かりました」

「瑞希には期待してるぜ。主戦力だからな」

「真琴君もです」

ふう……相変わらずだな。

オレは瑞希ほど強くないってのに……

「……真琴君」

「ん？今度はなに……うわっ！？」

「たまにはいいですよね？」

いきなり瑞希に抱きつかれた！？

たまにはって何年もやってないだろうが！！

「それとも真琴君は嫌ですか？」

「……はあ、ほんと適わないな。家に着くまでだぞ？」

「分かっています。続きは真琴君の部屋でやりますから」

「ちよつと待て！一体何をする気なんだ！？」

「秘密です。早く帰りましょう？」

「ほんとに瑞希はすごいな。尊敬できるや」

「？ どういうことですか？」

「別に。にしてもクラスの連中にはれたら明日は殺されそうだな」

あの後調べたんだがFFF団？とか言うのがあるらしい。

女とかかわりのある男子をリンチする集団らしいがそれじゃオレは

格好の的だからな。

「ふふっ、お兄ちゃん」

「……それはやめてくれ。思い出してしまっ」

「でも顔赤いですよ？」

「……………赤くない」

「市役所のデータハッキングしたのに？」

「言わないでくれ!!」

ああ思い出したくない!

自分だけ苗字が違うのが嫌だからって役所のデータハッキングして名前を「姫路真琴」にしようとしたなんて口が裂けてもいえない!

!(全部駄々漏れ)

「早く帰りましょう? 勉強みしてくれる約束ですよ?」

「そんな約束覚えは無いんだが」

「だから私の部屋で……………」

「断る。やるならオレの部屋だ」

「どうしてそんなに私の部屋に入りたがらないんですか!？」

「入りたがるほうが不自然だからな!？」

天然……………とでも言うべきなのか、やっぱり頭がいい人ってのはネジが2、3本抜けてるってのは本当なのかな……………

「はぁ……………しょうがない、今日は特別に……………」

「ほ、ほんとですか!？」

「……………なんてな。言うわけないだろ?」

「ひ、酷いです!」

「そこまで怒るな……………わかったから」

「……………ほんとですか?」

「オレが嘘ついたことあるか？」

「ついさっきついたばかりです」

「あ、それもそうか。こりゃ一本取られたな」

本当はちよつと恥ずかしいだけなんだよな……

あとは自分みたいな生き恥がそんなところに入る資格は無いという  
思い込みか……

嫌になってくるな。

「真琴君は、私のこと好きですか？」

「？ いきなりどうした？ そんなの好きに決まってるんだろ？」

「それって、家族とか、友達としてってことですよね？」

「……………そういうことだな」

「なら、女の子としてならどうですか？」

「！！？？ いやそれはだっているいろいろあるしそれはほらそのあの  
えつと……………」

いいいきなり何を言い出してるんだ！？

おおお落ち着け、おおお落ち着け、おおお落ち着け……………

「私は好きですよ。真琴君のこと」

「……………なにを言ってる……………」

「家族としても、友達としても、男の子としても……………」

「！！？？」

「ほら、早く帰りますよ？」

「／／／」

瑞希に手を引つ張られて、顔を真っ赤にしながら家路を急いだ。

しょうがないだろ？  
好きな女の子に……そんなこと言われたら……

第6問 EとFの差って案外なかったりする(後書き)

瑞希が積極的W

そして真琴が真つ赤W

ああ、どうなる!?

そしてAクラス戦の結末は!?

とはやし立てておいたけどそんないいことは起こらないと思う。

第7問 AとF(前書き)

もう夏休みも終わり……

これから更新ペースがドンドン落ちていくと思いますがよろしくお  
願いします。

## 第7問 AとF

真琴SIDE

「さて峰嶋。お前の意見を伺おうか」

Eクラス戦翌日、朝教室に入るなりクラス代表坂本雄二にこう言われた。

「意見？」

「ああ。Aクラスに仕掛けるんだろ？それも今日中に」

「根拠はあるのか？」

「出なければ昨日のEクラス戦は意味が無いからな」

なるほど。かつて神童と呼ばれただけの事はある。

中々鋭い。

「……坂本の言うとおり、今日中に仕掛ける。…というよりは今から仕掛ける」

「今からか？」

「ああ。Eクラス戦で消費した科目は数学だけだからな。補充テストはすぐに終わる。オレと瑞希は昨日の内に終わらせておいた」

「じゃあ今から行くのか……」

「何か問題があるか？」

「いいや、特には……」

「なら問答無用だ。オレと瑞希と坂本と……吉井、土屋、島田、木下弟はついて来い」

この人選に意味は………ないな。  
まあ一種のハツタリだが。

ところ変わってAクラスの教室。

「邪魔するぞ。Aクラス代表に話がある」  
「……………何か用？」

Aクラス代表、霧島翔子。



オレと瑞希が振り分け試験をリタイアしたために学年主席の座に着いた幸運な奴。

「このAクラスの設備、オレたちFクラスが貰い受ける」

「……………どうということ？」

「分からないか？FクラスはAクラスに宣戦布告する。そして勝つって事だ」

設備を奪うと言ってるんだから、それくらい理解して欲しいものだ。

「FクラスがAクラスに勝てると思ってるの？」

「ん？木下姉か」

ここで木下姉登場。

木下姉だけじゃなく、Aクラスのほとんどが同じように考えてるよ  
うだ。

「FはAに勝てないと誰が決めた？」

「最低ランクだからFなのよ。最低ランクが学年トップのAクラス  
に勝てるわけ無いでしょう？」

「じゃあやってみるか？」

こついう傲慢な女ほど自分の思い通りに行かなかったときが面倒だ。

「いいわよ。代表もいいわよね？」

「……………私がかまわない」

「なら決まりだ。勝負は5体5の一騎打ちだ」

「は？」

「聞こえなかつたか？5体5の一騎打ちだとオレは言ったんだ」

『きいてねえぞそんなの!』

『あとから言うなんて卑怯よ!』

『普通に勝負しろ!!』

うるさいギャラリーだな。

なにが学年トップだよ?

言ってる事はFクラスと大差ないな。

「勘違いしているようだから教えてやる。オレは普通にやるなんて一言も言っていない。責めるなら早とちりしたその女二人を責めるんだな」

「な!?なによそれ!?!」

「なんだ?学年トップのAクラス様はオレたちFクラスに勝つ自信がないのか?」

「なんですって!?!」

うるさいな。

自信が無いなら素直に言えばいいのに。

「ねえ……峰嶋君……一騎打ちって?」

「ウチ等にも説明してくれない?」

「雄二に聞いても知らないとしたか答えないのじゃ」

「坂本は本当に知らない。あとで説明してやるから今は下がってる」

と言うと吉井、島田、木下弟は下がっていく。

『ねえ姫路さん。やっぱり峰嶋君って性格悪いよ?』

『戦争に優しさはいらないって言ってましたから……それに真琴君は……』

『峰嶋がどうかしたかの?』

『あつ、なんでもないです！それよ、ここは真琴君に任せてもらえませんか？』

『まあ瑞希がそう言うならいいけど……あれ？土屋は？』

『……峰嶋、できる』

『土屋君は分かったみたいですね』

『？ どういうことかさっぱりだよ？』

分からんでいい。

どうせお前に出番は無い。

「アナタ、Aクラスをバカにするのもいい加減にして」

「お前はもういる意味が無い。オレはクラス代表と話があるんだ」

「……一騎打ち、受けてもいい」

「だ、代表！？」

ほう、随分といさぎいいな。

「……その代わり条件がひとつ」

「条件？」

「……負けたほうが、勝ったほうの言うことを何でもひとつ聞く」

「いいだろう」

『ちょ……峰嶋君！姫路さんがまだ了承して無いだろ！？』

『……！！（カシヤカシヤ）』

なんなんだあのバカ二人は？

いい迷惑だから消えて欲しいな。

「科目指定はどうするのよ？」

「そっちが4回、こっちが1回選ぶ。どのタイミングでこっちが選

ぶかはおれが決める」

「……余裕ね」

「当然だ。運で学年主席になった奴のクラスなんざ落とすのに時間は掛からない」

今の一言でAクラスのやつ等が一気に怒った。

「アナタ、失礼よ!」

「事実を述べて何が悪い?それに文句があるなら戦争にしてくれ」

「……優子、落ち着いて」

「落ち着ける訳ないでしょ!!」

「……彼の言うことは事実。峰嶋と姫路が振り分け試験を退席しなかつたら私は代表にはなれなかつた」

「そういうことだ。開戦は10時。それじゃあせいぜい作戦でも立てるんだな」

そう言つて席を発つ。

これくらいやれば十分だろ。

さらにところ変わってFクラス。

「峰嶋君。いくらなんでも言いすぎだ」

オレは瑞希以外のFクラス全員にとがめられた。

「挑発は戦争の基本だ。文句を言われる筋合いはない」

「だからって物事には限度つてもものがあるのよ」

「“運だけで代表になった奴”は流石に言いすぎじゃ」

「あれは褒め言葉だ。『運も実力のうち』という言葉を知らないのか？」

「「だからって言い過ぎなんだよ!!」「」」

まったく……

これだからバカは……

「お前らはAクラスの設備を使えるんだぞ？なにか文句あるのか？」

「う……」

「こんな下らない仲間割れをしてる暇があったら勉強しろ。だから

『Fクラス』と言われるんだ」

「それに霧島自身が認めただし、現実になんかそれが事実だ」  
「……………」

今度はだんまりか。  
やっつけられないな。本当に。

「さっさと顔上げる。説明してやるから」

この言葉に大多数の奴が「え？」って顔をする。

「オレたちがAクラスに“確実に”勝つためには5対5がベストなんだ」

「どうしてさ？」

「吉井のように思う奴も多いだろう。理由は単純。それ以外の方法はないためだ」

通常の戦争と同じように攻め込むとAクラスのほとんどをオレと瑞希だけで相手する事になる。オレは問題ないがこれは瑞希の体力的に無理のある作戦だから却下。

一騎打ちの方法を1対1か3対3にするとAクラスに勝ち目が無くなり間違いなく断られるだろうから却下。

1対1もしくは3対3だとオレと瑞希が出た瞬間に勝負が決まってしまうためだ。

7対7は勝ち星を稼げるのが3までという事で却下。

「—————だから5対5なんだ」

「誰が出るの？」

「オレ、瑞希、土屋、坂本、そして吉井だ」

「「「吉井!?」」」

なんでそんなに驚くんのだ?

観察処分者の雑用で召喚獣の扱いになれているこいつなら当然メン  
バー入りだろうが。

「まあ出番は無いと思うがな」

「なるほどな。それでこっちの科目選択が1回なわけか」

「ああ。そういうことだ」

土屋の点数調べて驚いたぞ。

Fクラスには特異な奴が多いってことにもな。

「そろそろ10時になるな。お前等、この戦争でボロいFクラスと  
はおさらばにしてやる」

「「「おおー!!」」」

いい感じだな。

やはり戦争は楽しい。

「真琴君……」

「瑞希か?どうした?」

「やっぱり私も言い過ぎだったと思います……」

「（がーん）……あとで謝っておく」

「そうしてください」

言い過ぎた。反省してる。



**第7問 AとF（後書き）**

次回はFクラス対Aクラスです！  
感想お待ちします！

## 第8門 頂点と底辺の決戦（前書き）

PV5000突破です！

これからもよろしくお願ひします！

## 第8門 頂点と底辺の決戦

真琴SIDE

時は10時、場所はAクラス

「それではこれより、Aクラス対Fクラスの、試験召喚戦争を始めます。一回戦の対戦者は、前に出てください」

学年主任にしてAクラス担任の高橋女史の声で戦争開始。

「最初から全力だ。瑞希、頼む」

「はい。行ってきますね」

確か瑞希の総合科目は5500位だったはず。そもそも学年次席レベルなのだから負ける可能性は低い。

「Aクラスに勝てるなんて、思わないことね」

「木下姉か。どのくらいの点数かは知らないがまあ余裕だろ」

瑞希に勝つには最低5200程度の点数が要る筈だ。

そのレベルの点数の保持者なら一年のときに噂を聞いてもいいと思う。

「Fクラス風情が調子に乗らないでよ！」

「お前の相手は瑞希だ。オレに構ってていいのか？」

「く……」

本当に乗せやすいな。傲慢な人間は。努力できる幸せを分かっている。

「対戦教科を決めてください」

痺れを切らしたのか高橋女史が木下姉に話しかける。

「数学でお願いします」

「数学ですか……」

「悪いわね姫路さん。試獣<sup>サモン</sup>召喚!!」

Aクラス 木下優子 数学 409点

「腕輪持ちは数学だけなのよ。貴女には本気で行かないといけないから」

「大丈夫ですよ。試獣<sup>サモン</sup>召喚!!」

Fクラス 姫路瑞希 数学 612点

「私も数学が得意ですから」

「うそ……」

数学で瑞希より高い点数を取れるのはまあ高橋女史か数学教師だけだろうな。

せめて古典か化学なら勝ち目はあったのに。

ちなみに勝負は一瞬でついた。

単科目での200点差は大きいからな。

「勝者、Fクラス姫路瑞希」

高橋女史が結果を告げる。

まあ必然だが。

「勝ってきました」

「おう。お疲れ」

そう言っただけで昨日と同じように瑞希の頭に手を乗せる。

『瑞希と峰嶋って付き合ってるわけじゃないのよね……?』

『あれはどちらかというと兄妹のようじゃが……』

『付き合ってる可能性も否定できないよね……?』

おかしな会話が聞こえたが無視しよう。

「んじゃ次は土屋。勝利の報告以外はしないで貰いたいな」

「……………任せておけ(グツ)」

親指を立ててこちらに向ける土屋。

こっちの科目指定はここで使う。

「君が出るならボクが出ようかな?」

確かあいつは……………工藤だったか?

土屋と同じく保健体育が得意だったはずだが……

「教科は何にしますか？」

「……………保健体育」

「君、保健体育が得意なんだってねえ……………でもさ、僕もかなり得意なんだよ。それも君と違って……………実技でね」

何を言ってるんだこいつは？

「……………！？（ブシャアアアア）」

「ムツツリーニイイイイイ！！！」

鼻血を出して倒れる土屋と駆け寄る吉井。そしてそれを見て笑う工藤。

バカはFクラスだけにして欲しい。

「そっちの君……………峰嶋君もこういうの苦手そうだよね……………。ボクでよければ保健体育の実技、教えてあげるよ？」

「フン。人に教えられるようなことは何も……………」

「真琴君にはそんな機会永遠にこないから心配要りません！！！」

「……………ない！！！」

そんなにはつきり言われると流石に傷つくじゃないか。

「それじゃそろそろ始めようか。試獣召喚<sup>サモン</sup>」

工藤が召喚獣を召喚する。

ちなみにプラズマディスプレイには『肉食系女子VSムツツリー』と出していた。

「……………試獣召喚」

Aクラス 工藤愛子 保健体育 447点

VS

Fクラス 土屋康太 保健体育 ???点

流石にAクラスだけあって中々の点数だ。  
土屋の点数はまだ表示されない。

「理論派と実践派、どっちが強いか、教えてあげるよ」

工藤はそう言って召喚獣を構えさせる。

斧とセーラー服という装備で、腕輪もきっちりしている。

「バイバイ、ムッツリーニ君!!」

「……………加速」

「え!?!」

確かに高得点だな。だが……………

Fクラス 土屋康太 保健体育 578点

VS

Aクラス 工藤愛子 保健体育 447点

土屋の敵ではない。

「……………加速終了」

「そ、そんな……………」

「勝者、Fクラス土屋康太」

保健体育だけは超高得点だな。

『すごいよムツツリーニ！保健体育だけで、奥の総合科目なみだよ！！』

それはどうかと思う。

それに土屋は保健体育以外では20〜40点がいいところだからな？

95

「……………それでは3人目は前に出てください」

「オレが行こう」

流石にFクラスが無傷でリーチをかけたとあって焦っているな？  
やはりAクラス担任という事か。

「……………私が相手をする」

「おいおい、代表が出てきていいのかよ？」

「……………私達の1勝目は、あなた」

「んじゃさつさとやるか」

「……………試獣召喚サモーン」

Aクラス 霧島翔子 総合科目 4769点



流石にAクラス代表。立派な点数だ。

「ここまで点数上げるのにいろいろ努力したんだろうな」

「……たいしたことは無い」

「ああ、あとさっきは悪かったな。運だけの代表とか言って」

「……気にしてない。それより早く召喚して」

「そうだな。Fクラス峰嶋真琴、参る！試験召喚<sup>サモン</sup>！！」

オレの召喚獣が召喚される。

ちなみに装備は2m強の大鎌だ。

そして……

Fクラス 峰嶋真琴 総合科目 17853点

5桁の点数が表示される。

「さて、全力で行こうかな？」

「……やっぱりすごい点数」

「大した事無いよ。こんな意味のない高得点より、努力して手に入れた低得点のほうがオレはよっぽどうらやましい」

「……？」

「悪い。人にする話じゃないな。じゃあ行くぞ……？1から？6、召喚<sup>サモン</sup>！！」

腕輪の能力を使わせてもらう。

最初から全力だ!!

6体の召喚獣が新たに呼び出される。

一つは3つの頭を持つ“地獄の番犬”。

一つは土と鉄の“巨人”。

一つは炎を纏う“炎獄の使者”。

一つは光降り注ぐ“天使”。

一つは強大な力を持った“最強”。

一つは“最強”を超える“究極”。

「来い!!」

オレの召喚獣の腕輪の能力……

召喚獣の召喚!

Fクラス	峰嶋真琴	総合科目	17853点
No.1	ケルベロス		2000点
No.2	ゴーレム		2000点
No.3	イフリート		2000点
No.4	ルシフェル		3000点
No.5	アルティマ		3000点
No.6	オメガ		5853点

V  
S

Aクラス 霧島翔子 総合科目 4769点

「……うそ……」

「全力で行かせてもらう。そう言ったからな」

「ねえ姫路さん」

「なんですか？」

「なんで峰嶋君は召喚獣を7体も同時に操れるのかな？」

「練習したからですよ」

「練習……はは……」

確かにあの能力は強いですけど、それと同じくらい疲れるし集中する必要があるんです。

「でも腕輪の能力なら点数が減ってないのはおかしいよね？」

「そのことなら、お話しする前に真琴君の能力について説明しないといけないんですけど……」

「説明も何も、召喚獣を増やす能力じゃないの？」

「吉井君もそう思うんですか？違いますよ」

「え？違うの？」

と首をかしげる吉井君。

まあそうですね。普通はそう思いますから。

「真琴君の腕輪の能力は、“腕輪の能力を自由に創造できる能力”なんです」

そして真琴君の腕輪の能力を創ったのは……

1年前。  
真琴の部屋。

「腕輪の創造”だけか？めんどくさいな……」

ベッドに横になりながら真琴君が呟きます。

「どういう能力にするか、決めてあるんですか？」

「いや全く」

「即答ですか……」

確かに漠然と腕輪の能力といわれてもそう簡単には決まらないでしょうけど……

「瑞希はどうだったんだ？」

「私ですか？ “熱線” でしたよ」

「楽でいいよなあ……それに引き換えオレのはめんどくさいことの上ない」

「そう言わずに考えましょうよ」

「んじゃ適当にビームとかでいいや」

「良くないですー!!」

というかそんな簡単に決めていいんでしょうか？

「じゃあどうするんだ？」

「そうですね……召喚獣の召喚とかどうですか？」

「ごめん。意味が分からない」

あ、そうですね。

もっと分かりやすく言つと……

「召喚獣が召喚獣を呼び出す、みたいな……」

「ゲームとかの召喚獣を真似るってことか？でもそれって操作出来なきゃ意味ないだろ」

「練習すればいいんですー!!」

「やるのオレなんだけど……」

でもいい考えだと思っただんですけどね。

「まあ他に案もないし、それでいくか」

「点数を消費して呼び出すって感じですよね？」

「……………いや、そうじゃない」

「？ どういうことですか？」

点数を消費しない……………？

でも点数を消費しないんじゃない能力は使えないのに……………

「点数を消費するのは、召喚獣を破壊されたときだ」

召喚獣にも点数を持たせてな。と真琴君は続けます。

召喚獣に点数を持たせて普通の召喚獣と同じように使えるようになるって事みたいです。

召喚獣が破壊された場合はもとの点数の3倍のダメージが帰ってくるとか、オレの普通の召喚獣が戦死したら消えるとか、色々な条件をつけるみたいです。

「点数を好きな点数に設定できるようにしてさ、自分自身の点数を超える点数はつけられないとか」

真琴君はとつても楽しそうにいろいろ考えます。

ここだけみれば普通の男の子なんですけどね……………

「ん？どした？」

「なんでもないですよ。ただ、楽しそうだなって思っただけです」

「まあこれも瑞希のアイデアのおかげだな。ありがとな」

「大した事ないですよ。これくらい」

そうやって完成したのが、ケルベロス、ゴーレム、イフリート、ルシフェル、アルティマ、オメガという、6体の召喚獣です。

「それじゃ、あの能力は、姫路さんが考えたの？」

「細かい部分や発動の条件は真琴君が考えたんですけどね」

能力が完成してから、ずっと練習してましたから。

先生に頼み込んで、放課後ギリギリまでずっと……

だからこそ、今の真琴君は召喚獣の扱いがうまいんです。

「あ、勝負がついたみたい」



『勝者、二年Fクラス峰嶋真琴。よってこの試験召喚戦争は、Fクラスの勝利となります』

真琴君、ちゃんと勝ったみたいですね。

「真琴君、お疲れ様です」

「おう、ちよつと疲れたけどこのくらいなら平気だ。それにこれでこのAクラスの設備はオレたちのもんだからな」

そう言つて真琴君は笑います。

でも、代わりにAクラスの人たちは……

「瑞希、Aクラスの連中の事か？」

「ふえ！？ど、どうして分かつたんですか！？」

「それくらいは分かるさ。昨日も言ったがこれは戦争だ。設備交換して、オレたちはAクラス、あいつらはFクラスの設備を使う事になる」

「でも、やっぱり……」

「はあ……いいけどな」

「え？」

「A連中の事の前に、あいつらと一緒に喜ぶくらいはしたらどうだ？」

真琴君が指さす先にいるのは大喜びする吉井君たち。

「そう……ですよね……やっぱり、喜ばなきゃダメですよね」

「そゆこと。まあとりあえずは約束は守れたな」

「まだ言つてたんですか？」

「そついう約束だったしな」

なんだかんだ言っつて、真琴君も優しいです。

「真琴君、あとでお話があるので、私の部屋に来てくださいね？」  
「断る」

「むう〜〜なんでそこで断るんですか？」  
「断りたいから」

久しぶりですね、このやり取り。

「いいから、絶対きてくださいねっ」

「……………瑞希……………きだよ」

先に吉井君たちの所へ行つた私には、最後の言葉は聞こえませんでした。

## 第8門 頂点と底辺の決戦（後書き）

さて、1巻の内容はこれで終わりですね。  
このあとはどうしましょうか……？

## 腕輪紹介。(前書き)

真琴の腕輪の能力、『召喚獣の召喚』の説明です。

## 腕輪紹介。

### NO・1 ケルベロス

三つの頭を持つ地獄の番犬。

6体の召喚獣の中で最も高い“速度”に重点を置いた召喚獣。  
体の大きさは普通の召喚獣の2倍程度。

破壊された場合、ケルベロスの基本点数の2倍のダメージを受ける。

### NO・2 ゴーレム

土と鉄で身体を構成された巨人。

6体の中で最も高い“防御力”に重点を置いた召喚獣。  
体の大きさは普通の召喚獣の1・5倍程度。

破壊された場合、ゴーレムの基本点数の2倍のダメージを受ける。

### NO・3 イフリート

地獄の炎を纏った“炎獄の使者”。

6体の中で最も高い“命中率”と“回避率”に重点を置いた召喚獣。  
体の大きさは普通の召喚獣と同じ。

破壊された場合、イフリートの基本点数と同じダメージを受ける。

NO・4 ルシフェル

神々しい光を持つ“天使”。

6体の中で最も高い“回復力”に重点を置いた召喚獣。

体の大きさは普通の召喚獣の半分程度。

破壊された場合、ルシフェルの基本点数の3倍のダメージを受ける。

特殊技：回復

500点消費して対象の点数をその時点の130%まで回復させる。

NO・5 アルティマ

強大な力を備えた“最強の者”。

6体の中で最も高い“攻撃力に重点を置いた召喚獣”。

体の大きさは普通の召喚獣の3倍程度。

破壊された場合、アルティマの基本点数の3倍のダメージを受ける。

NO・6 オメガ

“最強の者”をも超える“究極の者”。

6体の中において全てに秀でる“全能であること”に重点を置いた  
召喚獣。

体の大きさはアルティマとまったく同じ。

破壊された場合、召喚者は戦死する。

腕輪紹介。(後書き)

閑話が入るか清涼祭編まで行くか……  
まだわかりませんが、これからもよろしく願います。



第9問 清涼祭編開始 プロローグ(前書き)

短くてすみません……

## 第9問 清涼祭編開始 プロローグ

真琴SIDE

ある日の夜、オレと瑞希は瑞希の父親と姫路家のリビングで話し合っていた。

「……つまり、あのバカ騒ぎするFクラスのバカ共の悪影響が瑞希に出ると困るから転校させたいということですか？」  
「理解が早くて助かるよ。私としてもこんなことはしたくないんだが……」

瑞希のお父さん（オレはおじさんと呼んでいる）の言うことは正論だ。  
オレもおじさんの立場なら同じことを考えるだろう。

しかし……

「わ、私は転校したくないよ……」

「本人がこのとおりなので無理強いするのはどうかと思いますが……」

ちなみに体質（？）上の問題で瑞希が転校すればオレも一緒についていく事になる。

吉井と坂本と言う面白い馬鹿がいるのにそれを諦めるのは多少もったいない気もする。

「Aクラスとの試召戦争で設備がかなり良くなったのは知ってるよ。

だがそれでも学年の底辺に位置する連中とともに生活しなければならぬのは変わりないだろう？」

まったく正しい。  
眠くなるくらい正しい。

「学年の底辺なんかとしては瑞希に悪い影響が出ないとも限らないんだ」

「反論の余地もないです……」

言われていい気分がしないのもそうだが散々Aクラスに言われたとおり基本Fクラスは馬鹿の集まりだ。勝てたのは土屋や瑞希と言ったイレギュラーな存在がいたからだ。基本そのほかの40数名は馬鹿である。

「Fクラスの設備がよくなっただけでは足りないと言う事ですか？」  
「そういうことだ。まあ出来ればこうしたくはなかったが仕方がない」

正論ばかり並べられている以上反論どころか意見を言うことも出来ない。

「……どうして」

「「？」」

「どうしてFクラスじゃだめなの……？みんな優しくして、いい人たちなのに……！」

「だけどFクラスだろう？」

おいおい、今ここでそれを言うのか……？

「じゃあ、今度の清涼祭の召喚大会でFクラスが優勝したら転校の話はなかったことにして!!」

「ど、どうしてそこで召喚大会の話が……」

「つまり瑞希は召喚大会でFクラスが優勝して、学年の底辺と言う汚名を返上しようっていいたいんですよ」

あのメンバーではどうやっても無理があるが。

「……分かった。Fクラスが優勝したら、転校の話はなかったことにしよう」

「ほ、ほんと!?!」

「ああ。約束する」

何度も言うが無理である。

実戦経験もほとんどなし。点数も最低ではどうやってもEクラスと互角がいいところだ。

「真琴君も協力してください!」

「ああ、可能な限り手を尽くす」

オレ個人としても吉井と坂本という見てて面白いあいつらを手放すのは惜しいからな。

こうして瑞希の転校をかけた召喚大会が幕を開ける。

……召喚大会より清涼祭が優先されるかもしれないけどな。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1515w/>

---

バカとFクラスと転校生 IF ~オレと瑞希と召喚獣~

2011年10月8日23時34分発行